

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平10-8303

(43)公開日 平成10年(1998)1月13日

(51)Int.Cl.⁵

A 41 C 1/00
A 41 B 9/04

識別記号

序内整理番号

F I

A 41 C 1/00
A 41 B 9/04

技術表示箇所

F
G

審査請求 未請求 請求項の数2 FD (全4頁)

(21)出願番号

特願平8-181311

(22)出願日

平成8年(1996)6月20日

(71)出願人

石飛 修
大阪市都島区毛馬町2丁目11番 リバーサ
イドしろきた団地第33号棟第802号室

(72)発明者

石飛 修
大阪市都島区毛馬町2丁目11番 リバーサ
イドしろきた団地第33号棟第802号室

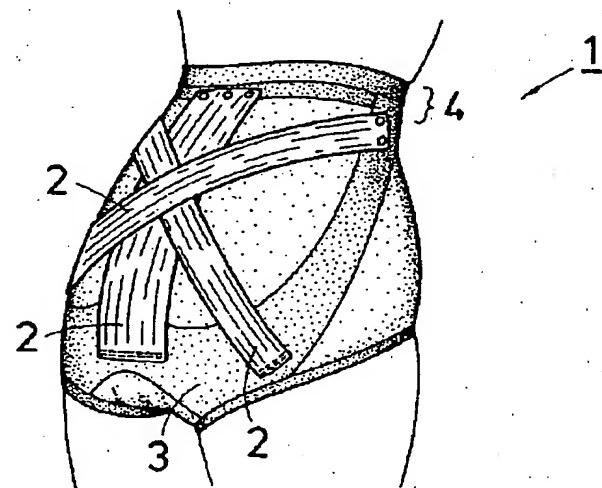
(74)代理人 弁理士 永田 久喜

(54)【発明の名称】 ガードル

(57)【要約】

【課題】 女性の体型を簡単に補正できる下着を提供する。

【解決手段】 脊部下方に位置する受部に帶状体が固着され、該帶状体の他方端部には固定具が固着され、腰部には固定具と対応する固定具が設けられている。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 脊部下方に位置する受部に帯状体が固着され、該帯状体の他方端部には固定具が固着され、腰部には該固定具と対応する固定具が設けられていることを特徴とするガードル。

【請求項2】 脊部下方に位置する部分に弾性塊状体が固着され、且つ左右両側に形状補正パッドが設けられていることを特徴とするショーツ。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、ガードルに関するものである。

【0002】

【従来の技術】 ガードルとは、腹部をおさえ、腰の線やヒップラインを美しく保護、補正する女性用下着である。通常、前中央に綿サテンなどの布地を用い、周囲はオペロン、スパンデックス等を使用したコルセット様のものである。しかし、ボーン等は使用せず、全体的に弾性に富んでいるため圧迫感も少なく、コルセットに代わって広く普及しているものである。

【0003】 このガードルには、ショーツ型、セミロング型、ロング型等があり、その形状が少し異なるが基本的に同様である。そのほとんどが、サイドからヒップにかけてオペロン裏打ち、補強によるピップアップ式となっている。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】 このようなガードルは、体形を補正し少しでも美しく見せたいという女性の欲望から出たものである。現在のものは腹部の押圧に関しては一定の効果がある。これは、単に腹部周囲を小さくするだけよいため、簡単であるためである。

【0005】 しかし、ヒップラインを上昇させ若々しいヒップに見せるという効果は、あまり期待できない。これは、ヒップラインを上げるために、単に弾性のある下着を装着するだけでは無理なためである。そこで、女性の間では、よりヒップアップ効果のある下着が待望されていた。

【0006】

【課題を解決するための手段】 以上のような状況に鑑み、本発明者は鋭意研究の結果本発明ガードルを完成させたものであり、その特徴とするところは、脊部下方に位置する受部に帯状体が固着され、該帯状体の他方端部には固定具が固着され、腰部には該固定具と対応する固定具が設けられている点にある。

【0007】 ここで、受部とは、ガードルを装着した時に脊部の下部に位置し脊部を受ける部分であり、一般的には比較的丈夫なオペロンやスパンデックスの部分であるが、全体部分と同様の材質でもよい。また、この受部はショーツ型では比較的端部に位置することとなるが、ロング型等では中間部分ともなる。

【0008】 帯状体とは、上記受部に固着された帯状のもので、これで受部を上方に引っ張り上げるものである。固着の方法は縫着が簡単であるが、他の方法でもよい。勿論、着脱自在に固着すれば不要な時には外せて便利である。着脱自在の固着方法とは、ホックや面ファスナーである。帯状体の材質は、ゴム等の弾性体や伸縮性のあるポリウレタン（スパンデックス等）が好適である。しかし、引っ張り上げて固着できればよいため、弾性体でないものでもよい。また、目立ち易さ等から、薄くて強度のあるものが好ましい。この帯状体は、1本でも、複数本でもよい。1本の場合には、中央下部に設ける。また、2本の場合には交差するように設けても、平行に設けてもよい。更に、中央部と両側の3本設けて、両側の2本を交差させてよい。また、交差部がどうしても肉厚になるため、3本の帯状体と同じ形状のものを1本で構成し、重なる部分をなくしてもよい。

【0009】 帯状体の長さは、弾性体か否かによっても異なるが、引っ張り上げて上方で固定できる程度の長さである。また、帯状体の幅については、複数存在設ける場合には中心に位置するものを大きくしてもよい。

【0010】 帯状体を固着する位置は、前記した受部であるが、最端部でも、比較的上方でもよい。これは、固着する部分の材質にもよるが、要するにヒップアップするように引っ張り上げができる位置ならばよいということである。

【0011】 帯状体に固着された固定具とは、面ファスナー、ホック、カギホック等どのようなものでもよい。また、これと対応する位置の腰部には、この固定具と係合できる固定具が設けられている。腰部とは、一般的ガードルの上端であり、腰を締めるベルト的な部分を言う。しかし、ここでは少し広い概念で使用し、もう少し下の部分も含めた部分とする。この部分は、通常丈夫な材質が用いられており、また比較的厚いものが存在しても目立たない部分である。また腰のくびれがあるため、下からの引っ張り力にも相当耐える。

【0012】 例えば、帯状体の自由端に面ファスナーを固着し、それと対応する位置に面ファスナーを設けておけば、帯状体を引っ張り上げて面ファスナーを押し付けるだけで固定できる。

【0013】 この帯状体以外の本体部分は通常のガードルでも、また比較的柔軟な材質で構成されたものでも構わない。

【0014】 次に請求項2のショーツについて説明する。これはショーツであるが、必ずしも下に他のショーツを履かないという意味ではなく、そうすることは自由である。この場合、ガードル的な使用となる。本発明のショーツは、脊部下方に位置する部分に弾性塊状体が固着されている。この弾性塊状体は、通常硬質のスポンジであるが、柔らかめのゴムでもよい。大きさとしては、幅が10~20cm程度で、横断面が3×3~10×1

0cm程度である。全体としては、角柱、円柱、その他
の棒状体であるが、比較的偏平なものでもよい。

【0015】この塊状体は、ショーツの所定位置に設けた二重部分（袋）内に収納するのがよい。勿論、他の方法で固着してもよい。

【0016】また、形状補正パッドとは、臀部の中央部分の豊満さを補うためのもので、左右両側のほぼ中央部分に設けられている。これも、所定位置に設けた二重部分（袋）内に収納するのが便利であるが、他の方法で固着してもよい。このパッドは発泡プラスチック製が好ましいが他の材質でもよい。また、形状は内側は臀部に沿うようにし、外側は理想的なスタイルから決定すればよい。

【0017】更に、形状補正パッドと弾性塊状体とを一体に固着したものでもよい。それぞれの材質は異なっていても、同じものでもよいが、装着する時や製造時に簡単なようにこれらを固着又は一体化しておくのである。固着や一体化の方法は、接着、融着等の他、収納する袋を固着したりする等どのような方法でもよい。

【0018】このショーツには、補強用としてガードルのようなゴム、スパンデックス等の材質の部分を設けたり、内包してもよい。これは、弾性塊状体を引っ張り上げるためにあり、ある程度の強度が必要なためである。

【0019】このショーツに用いる弾性塊状体や形状補正パッドを本発明ガードルに用いることも可能である。特に、形状補正パッドの場合、ヒップアップしただけでは容量が小さい人の場合に好適である。

【0020】

【発明の実施の形態】以下図面に示す実施の形態により本発明をより詳細に説明する。図1は、本発明ガードル1の1例を身につけたところを示す斜視図である。この例では、通常のガードル本体に帯状体2が3本下部で縫着されている。縫着位置は受部3であり、この例では端部より少し内側となっている。これは、端部が捲れ上がるのを防止するためである。固着の方法としては前記した通り、ホック等を用いてよい。勿論、より端部で固着してもよい。帯状体2は弾性を有する薄いゴムであり、上部はホックでベルト部等の腰部4に着脱自在に取りつけられている。図2は、図1の側面図である。図1の帯状体2の中央部のもの2が上方に臀部を持ち上げているのがわかる。全体として矢印方向に臀部を持ち上げる。また、両サイドの帯状体2は、臀部が左右に分かれて横に広がるのを防止し、中心方向に寄せる効果を發揮する。この図では、中央部の帯状体の幅を大きくしているが、このようなものに限らないことは当然である。

【0021】図3は、帯状体2の上部の固着を外したところを示す。この例では、本体部の周囲の丈夫な部分である受部3に帯状体2が3本縫着され、自由端部にホック5がそれぞれ固定されている。そのホック5と対応する位置の腰部4に、係合するホック6が設けられてい

る。この例では、本体部の生地には中心部分と両サイドの上下方向に丈夫な部分7がある。通常は、装着した後にこの帯状体2を引っ張って上部で係合固定するのであるが、最初から係合させておいて装着してもよい。

【0022】図4は、図3と同様の図であるが、この例では本体の生地にも上部な部分が充分設けられており、これだけでもある程度のヒップアップ効果はあるが、更に帯状体2で引っ張り上げるため、相当な体型補正が可能となる。

【0023】次に、図5は本発明ショーツ8の1例を示す正面図である。通常のショーツに弾性塊状体9が設けられているのがわかる。位置は、臀部の下方にあたる部分である。この例の弾性塊状体9は少し堅いスポンジである。図6は、図5に示すショーツ8の背面図である。後ろ部分に形状補正パッド10が左右両側に固着されている。また、このショーツ8もゴム等の丈夫な部分11が設けられている。この弾性塊状体9と形状補正パッド10はショーツの袋状にした二重部分に収納されている（詳細は図示略）。形状補正パッド10は、丈夫な部分11を避けた位置が望ましい。

【0024】図7は、本発明のショーツの他の例を装着したところの斜視図である。左右の形状補正パッド10と弾性塊状体9が一体化しているのがわかる。この例では、全体として一体化（一体成型、接着等により）している。この図では見えにくいが、弾性塊状体9は臀部の下方に位置して、圧迫されながら、臀部を上方に持ち上げている。また、形状補正パッド10によって豊満な形状に見せている。勿論、このパッド10の形状は自由であり、より大きくても、全体に広がっていてもよい。この例では、形状補正パッド10と弾性塊状体9が一体化しているため、製造が非常に簡単である。また、履き心地も良い。

【0025】

【発明の効果】以上詳細に説明した本発明では、次のような大きな効果がある。

① 帯状体を有するガードルでは、ヒップアップ効果が非常に大きく、驚くほど体型補正ができる。

② また、縫着や面ファスナー止め等で、帯状体を固着するだけでよいため、製造が簡単である。また不要になれば外すこともできるため、ガードル本体部が無駄にならない。

③ ショーツの発明では、単にショーツを履くだけである程度のヒップアップ効果が期待でき非常に便利である。

④ ショーツの場合、引っ張りあげるためのゴムや硬質材を使用しなくとも、簡単にヒップアップができるため、圧迫感や締めつけ感が少ない。

⑤ また、従来のショーツに、パッドや弾性塊状体を固着するだけでも製造できるため、非常に簡単である。

【図面の簡単な説明】

5

6

【図1】本発明ガードルの1例を示す斜視図である。

【図2】図1に示す例の側面図である。

【図3】本発明ガードルの1例を示す背面図である。

【図4】本発明ガードルの他の例を示す背面図である。

【図5】本発明ショーツの1例を示す正面図である。

【図6】図5に示す例の背面図である。

【図7】他の例を示す斜視図である。

【符号の説明】

1 ガードル

2 帯状体

3 受部

4 腰部

5 ホック

6 ホック

7 丈夫な部分

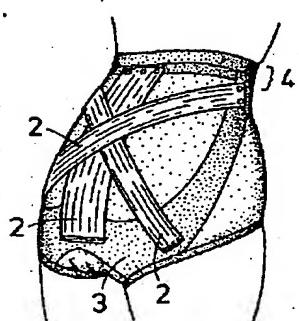
8 ショーツ

9 弹性塊状体

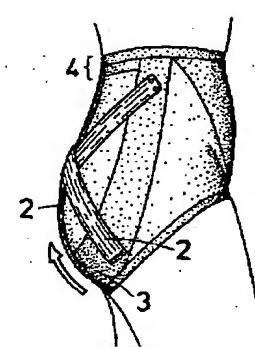
10 形状補正パッド

11 丈夫な部分

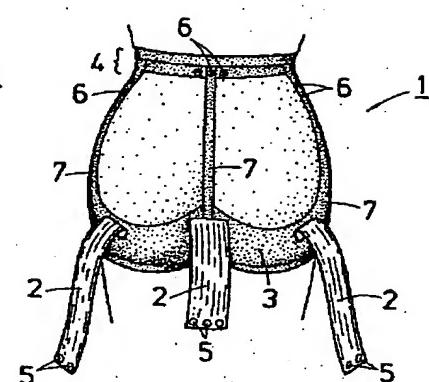
【図1】



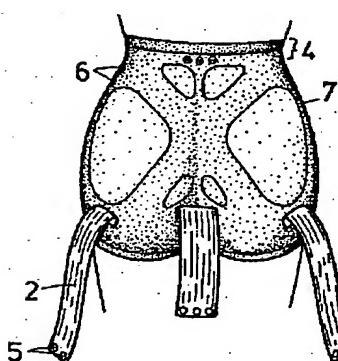
【図2】



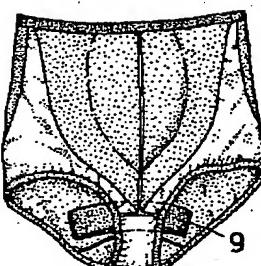
【図3】



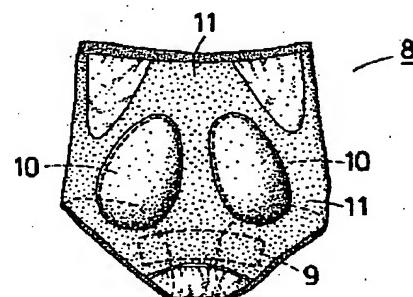
【図4】



【図5】



【図6】



【図7】

